

# 倫理

## 第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

### 1 前 文

本年度大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）の公民科延受験者数（追・再試験含む）は、201,528人であり、「倫理」は30,757人（科目選択率15.3%）、「倫理、政治・経済」が48,701人（24.2%）であった。「倫理、政治・経済」の科目選択率が約1%増加しているが、「倫理」は約1%、約3,000人の減少となっている。本年度の本試験における「倫理」の平均点は昨年度より約6.5点、「倫理、政治・経済」についても約7.5点下がっている。これは、問題自体の難易度が上がり、昨年度以上に作り込まれた出題となっていることに起因すると考えられる。加えて、公民科科目間での受験者層が異なる傾向が続いていると考えられ、平均点の推移のみを見て、問題の妥当性を判断することは難しい。

本年度の問題は各分野からバランス良く出題され、基礎・基本から総合力まで判断することが出来る良問が多く含まれていた。リード文は受験者に対して倫理的課題を問い掛けるものであり、「倫理」を学んできた意義を再確認できるよう工夫がなされていた。時間と労力を惜しまない問題作成部会の取り組みに対し敬意を払うと共に、次年度以降も是非継続していただきたいと考えている。

以上を踏まえて、本年度の試験問題について次の視点から検討及び評価を実施した。

- (1) 高等学校学習指導要領の目標及び内容に適しているか。また、それに準拠した教科書や、高等学校における学習内容に即した問題であるか。
- (2) リード文はメッセージ性を持ち、受験者の思索の糸口になるようなものであるか。
- (3) 基礎・基本から総合力、判断力及び応用力を問うものまで、バランス良く出題されているか。
- (4) 問題の難易度、配点及び出題方法が適切で、各分野のバランスが取れた出題であるか。

### 2 試験問題の内容・範囲等について

第1問 「自他の結び付き」について（現代の諸課題と倫理、青年期の課題、西洋思想）

支えている側の人間が、実は支えられていると指摘する「自立」に関する考察がテーマである。福祉社会において、人間は一人で生きていけるわけではなく、様々な関わりの中で生かされていることを受験者に考えさせる出題である。リード文に心揺さぶられる、よく練られた良問で、難易度としては標準的である。

問1 平易な設問。

問2 標準的な難易度の設問。

問3 「40歳くらいになった自分の将来像」についての調査結果をグラフから読み取る問題である。解答を導くキーワードが示されているが、やや難しい設問。

問4 エヴァ・フェダー・キテイからの引用資料。やや難しい設問。

問5 ユダヤ人の宗教哲学者、ブーバーが出題されているが、正解を導くことはそれほど困難ではない。標準的な難易度の設問。

問6 センの説明に、ロールズとホブズが混在し、やや難しい設問。

問7 平易な設問。

問8 標準的な難易度の設問。

問9 やや難しい設問。

問10 リード文の趣旨読み取り問題。標準的な難易度の設問。

第2問 「人を助けることの意義」について（源流思想）

人間は、人を助けることを通して、共に生きることの価値に触れ、人生をより豊かなものにしていくことができる。他者との関係が希薄な現代社会において、助けを施された側も他者に「迷惑を掛けてしまった」と罪悪感を持つことがしばしばあるが、人助けは自己犠牲ではないことを改めて認識することができる。開かれた人と人とのつながりへ自らを向かわせ、また自身の在り方を問い直すことができるという、人助けの意義が受験者へ伝わるリード文である。

問1 愛をめぐるイエスの教えについての理解を問う、標準的な難易度の設問。

問2 パウロについての理解を問う、平易な設問。

問3 クルアーンの一部を読ませ、イスラーム教の教えを説明したものとして適当なものを選ぶ問題である。資料の趣旨だけではなく、イスラーム教についての知識を踏まえて解答するものとなっている。標準的な難易度の設問。

問4 プラトンの理想国家、仏教の五戒、イスラーム共同体、ユダヤ教の律法について、それぞれが理解されているかを問う、標準的な難易度の設問。

問5 大乘仏教における、空の思想、唯識思想、仏性思想についての理解を問う、やや難しい設問。ア～ウの正誤をそれぞれ判断するのだが、ウは、仏性思想の根本である「全てのものに仏としての可能性がある」ということが分かっているならば、「功德を積むことで、自らが仏となる可能性を獲得すべき」という記述が誤りであると気付くことができる。しかし、受験者はウの冒頭にある『涅槃経』という用語にまず戸惑うと考えられる。

問6 孟子の四徳のうち「義」の徳の芽生え（四端）について知識を問う、平易な設問。

問7 アリストテレス、ソクラテス、ゼノン、エピクロスがそれぞれ説いた幸福やよき生についての理解を問う、標準的な難易度の設問。

問8 老子、孔子、朱子の思想についての理解を問う、標準的な難易度の設問。

問9 リード文の趣旨に一致する記述を選ぶ標準的な難易度の設問。

第3問 「有限な生をいかに生きるか」について（日本思想）

日本人の死生観をたどることで、有限な生をいかに有意義なものにするかを問うリード文である。生と死というテーマに沿ってうまくまとめられている。また、吉田松陰の『講孟余話』はリード文のテーマに沿った良い資料であり、選択肢の表現もよく練られたものであった。ただ、山片蟠桃、三浦梅園、塙保己一、森有礼など、周辺の取り扱いの人物の出題も多く、また、選択肢の誤文が不自然に感じられるものもあった。扱う範囲の広さや、項目の多さに加えて、本試験同様に平均点の調整という課題もあろうが、日本思想の根幹をなす人物の、更にその中心思想の十全な理解を問うという姿勢を貫いていただければと考える。

問1 神々への信仰を各時代についてまとめた、標準的な難易度の設問。

問2 聖徳太子の仏教理解についての基本的知識を問う、平易な設問。

問3 全ての選択肢に阿弥陀仏という言葉を入れたためややぎこちなく感じられるが、誤文は、源信、空海、日蓮を踏まえたことが明確である。標準的な難易度の設問。

問4 教科書でもやや扱いの少ない思想家の、更に突っ込んだ思想の理解が求められている。適当でないものを選ぶ設問なので、加上説が山片蟠桃でなく富永仲基の説だと知っていれば、他の選択肢の細かい内容を知らなくとも正答できるが、受験者にとっては難しい設問である。

問5 吉田松陰の『講孟余話』からの原文資料であり、読みこなすのに手間が掛かったと思われる。内容さえ読み取れば、選択肢の誤りは明確であり、標準的な難易度の設問。

問6 下線部からの設問の立て方に苦勞が感じられる。塙保己一は細かい知識であるが、本居

宣長の『古事記伝』を知っているかどうか問われる、平易な設問。

問7 森有礼の『妻妾論』の内容までは学習が進んでいなかった受験者も多かったのではない。正誤判定問題でこのレベルの知識を要求されると、完答が難しい設問であったと言える。

問8 内村鑑三の基本的な事項を問う空欄補充問題で、標準的な難易度の設問。

問9 本文の趣旨を問う設問。それぞれよく読めば正答できる標準的な難易度である。

第4問 「理念と現実世界や人間の在り方との関わり」について（西洋近現代思想）

理念を考察することが現実に向き合うことにつながることを示唆しつつ、自分自身や世界の在り方を常に考えていくことの必要性をコンパクトにまとめながらメッセージとしているリード文である。ただし、文中でラ＝メトリという目新しい人物が登場した。覚えるべき事項が増加する結果につながりかねないことに危惧を感じる。また、出題についてもルネサンスや宗教改革、モラリストや実存主義を除く現代の思想は扱いが軽く、本試験と比較すれば範囲が狭まった印象を受ける。更に、細部に至る正確な知識や理解を求める設問もあり、全体としてはやや難しい大問であると考えられる。

問1 デカルトの精神論・認識論について、正確な知識と理解を前提に考察しなければ正解を見出すことができない、やや難しい設問。

問2 フッサールの思想は細かい知識の部類に入るとも思われるが、「万有引力」、「モノド」、「感性」「悟性」「物自体」という言葉から消去できる。標準的な難易度の設問。

問3 カントの認識論や道徳論に関する正確な知識と理解を前提に考察しなければ正解を見出すことができない、やや難しい設問。

問4 読解力を試す問題で、資料文に即して深く考える必要がある。特に、④については、スピノザの思想を正確に理解していないと引っ掛かる可能性も高い。従って、細かい知識を要求しているとも考えられる。やや難しい設問。

問5 弁証法に関する基本的理解ができていれば正解できる標準的な難易度の設問。

問6 実存の三段階についての基本的理解ができていれば正解できる標準的な難易度の設問。

問7 アは「職業労働を通じて…救済の確信」という文言から、イは『百科全書』という言葉、ウは「世界最初の社会主義国家を建設した」という文言から正解が得られる平易な設問。

問8 ニーチェの思想に関する基本的知識と理解があればa・bは容易に解答できるが、cはサルトルの思想をきちんと理解しておく必要がある。標準的な難易度の設問。

問9 リード文趣旨の読解力を問う設問。①は「古代の思想に立ち戻る」、③は「現実を捉え損ねてきた」、④は「現実がどうであれ」が本文と合致しない。標準的な難易度である。

### 3 試験問題の分量・程度等について

試験問題は、昨年度と同じく大問4、総設問数37であったが、各大問のリード文、設問における引用資料、空欄補充問題の文章をそれぞれ読み取ることに加えて、第1問の問3グラフ問題、「将来の自分の姿」で、図の示す結果を説明した選択肢の文章がそれぞれ数行にわたっており、正確に読み取って判断するのに受験者は多くの時間を必要としたと考えられる。

第1問、第2問がそれぞれ標準的な難易度、第3問、第4問がそれぞれやや難しく、全体としての難易度はやや難しかった。本試験と比較すると、やや細かい知識が要求される設問が見られた。

設問全体としては、知識理解を確認する問いから思考判断を求める問いまで「倫理」で学んだ様々な学力を適正に判断できる設問がバランス良く出題されている。また、各設問がリード文の各テーマに沿った内容となるように工夫されていたと感じる。第1問の資料問題では、受験者にはなじみのない哲学者エヴァ・フェダー・キテイの育児介護についての考察が取り上げられ、テーマの

「支援」に沿った設問となっていた。第3問の吉田松陰の「死者の霊魂と葬祭について」、第4問のスピノザの自由について述べた資料、共に倫理の学習で得た知識ではなく、資料を実際に読んで理解する形式であり、総合的な思考力を問う意欲的な設問であった。

#### 4 試験問題の表現・形式等について

7択以上の選択問題が10問と、昨年度の8問より2問増加した。しかし、その中でも、三つの文章の正誤を全て正確に判断できないと得点できない出題は昨年度と同じく4問、3行以上にわたる長文の正誤判定問題も昨年度と同じく2問と、この点については昨年度とほぼ同じであろう。

また、出題の類型については、主に総合的な思考力・判断力を問う問題は昨年同様9問、27点配当であったが、主に基礎・基本的な概念などについての理解を問うものが21問、57点配当から13問、34点配当に減少し、主に基礎・基本的用語や人名を問うものが昨年度7問から15問、16点配当から39点配当に増加した。しかし、後者については単純に語句を問うのではなく文章で問う出題や、細かい知識を問う難易度の高い問題が増加した。配点については、第4問の問1のように、細部に至る知識や理解を試すやや難しい問題の配点が2点である一方、8択ながらも平易な知識を問う出題で3点配当の出題も見られるなど、出題者の考える問題の難易度と受験者の学力レベルの乖離<sup>かいり</sup>や、難易度は考慮せず出題形式で配点を決めていると感じさせる部分もあった。なお、各設問の表現については、受験者が十分に理解できる適切なものであったと考えられる。

#### 5 要 約（総括的な評価）

リード文においては、近年第1問には会話文が続いたが、追・再試験においては会話文ではなかった。しかし、よく練られたリード文であり、設問との関連などにも目配りがされ完成度の高いものとなっている。資料問題については、本試験とは異なり、なじみの薄い著作からであったが、本試験同様リード文のテーマと有機的に関連したものであった。各設問についてはやや難しいものが多く、平均点が大きく下がった本試験と同様、全体としては難易度が高かったと感じる。

ここ数年の文章量の増大や正誤判定問題・組合せ問題の増加に加えて、教科書や高校の現場で扱われる少ない人物や項目の出題が目立ったことも難化の理由となろう。ただ、全体的には、本試験同様、総合的な力を問う良問や意欲作も多く、評価できるものである。高校での学習の現状や生徒の動向を踏まえ、学習の成果がよりよく反映される出題を続けていただくようお願いしたい。